人物往来

“マツダ代表”で重責

田島　文治氏（高19・広島アルミニウム工業社長）

「マツダグループを代表して行ってこいと送り出された」と話すのはマツダの協力部品メーカー大手、広島アルミニウム工業(広島市)の田島文治社長。マツダの渡辺一秀前会長の後任として、7月末に広島商工会議所の副会頭に就任した。

自社の業績は好調で「マツダだけでなくアイシン・エイ・ダブリュなどトヨタ自動車グループの増産に対応」するため、新工場を相次ぎ建設するなど生産増強を進めている。「これまでは会社を元気にすることが社会貢献だと考えてきた。(今後は) 公の場で働くことがどういうことか、勉強していきたい」と気を引き締めていた。

(日経　06.10.04)

熱いシュート後輩に喝
修道中・高がＯＢと交流試合

広島市中区の修道中・高で15日、サッカー部の創部80周年記念イベントとして現役とＯＢの交流試合があった。国体や全国高校選手権の優勝メンバーら約40人の先輩たちが中学、高校の現役137人のために一肌脱いだ。

現役とＯＢが混成チームで対戦。ＧＫで1961年度の国体、全国高校選手権の二冠を達成した無職坂井忠昭さん(63)＝川崎市＝がボレーシュートでゴールを割れば、49年の国体3位チームの会社員林孝治さん(75)＝広島市佐伯区＝も競り合いで現役に勝った。

「(ゴール前で) 迷ったら打て」「周りをよく見て」と、げきも飛んだ。

「修道ブルー」のユニホームで、全国有数の強豪として一時代を築いた。だが、最近では観音高、皆実高など同じ広島市内のチームに歯が立たないでいる。二冠当時主将だった医師若山待久さん(63)＝千葉市＝は「技術が高い。後は一瞬一瞬のプレーにどこまで集中できるか」と期待を寄せる。

先輩のプレーを目にした、高校2年生のＤＦ小野塚太郎副主将は「足元の技術などがうまい。やっぱりすごい人たちだったんだな」と感心。同2年のＭＦ岡下直裕主将(17)も「先輩たちのためにも、修道サッカーを盛り上げたい」と誓っていた。

(中国　06.10.23)

交流温か歩行横断400キロ
タクラマカン砂漠踏破

中村憲二郎氏（高41・専門学校講師）

中国西部のウイグル自治区にあり、世界で二番目に広いタクラマカン砂漠の単独歩行縦断に広島市西区の専門学校講師中村憲二郎さん(35)が挑んだ。約400キロ。今月3日まで18日間かけて踏破に成功した。

面積約32万平方キロと日本全土にほぼ匹敵する砂漠。南方にあるクンルン山脈のふもとに発して北へ流れるホータン川沿いのルートを選び、水量が減ると現れる河床を歩いた。9月16日、砂漠北部の町阿拉尓(アラール)を出発。予想に反して水量が多く、所によって腰まで水に漬かりながら蛇行する河床を歩いた。川の泥水に消毒薬を入れ、飲み水にした。

途中、目立った集落はなく、時折出会うのはヤギを放牧するウイグル族の男たち。泊めてもらった70歳ぐらいの老人の掘っ立て小屋にあったのは、毛布や鍋だけと質素そのもの。家畜用の柵の木を燃やして、なけなしの小麦粉でナン(堅めのパン) を焼いてくれた。

終着の町墨玉では、昨年の下見の際に知り合ったタクシー運転手と偶然再会。ナンやブドウで祝福された。「現地の人にとっては最大限のもてなし。行きずりの旅人のために親身になれる心に打たれた」と振り返る。

これまでもオーストラリアの砂漠横断などの冒険を重ねてきた。「両親や職場をはじめ周囲に迷惑を掛けた分、経験を少しずつ社会に還元していきたい」と話している。

(中国　06.10.27)

第63回中国文化賞
受賞者の業績と横顔

土肥　雪彦氏（高６・広島県立広島病院長）

46年間にわたる医学研究で地域に貢献してきた。日本肝移植研究会会長を務めていた時に、脳死臓器移植再開が実現。しかし、脳死の臓器移植はさまざまな議論を呼ぶなど、移植医療は幾多の壁にぶつかりながら歩む、いばらの道でもあった。

1971年、米国で学んだ手術技法を生かして中四国初の生体腎移植に成功。「あきらめムードが漂う中の手術。患者のチャレンジ精神がなければできなかった。患者は“戦友”のように思える」と振り返る。その患者が35年後の今も元気でいるのが何よりもうれしい。

移植手術は広島大と土谷総合病院の医師がチームをつくって取り組んだ。「この賞は私一人のものではなく、皆の努力と結果に与えられたものだ」。このチームこそ、現在の広島大の移植医療の礎を築いたと言っても過言ではない。

91年、日本で初めて血液型が違う母子間の成人間生体部分肝移植を実施。「母子の強い意志が手術に踏み切らせた」と語る背景には、慢性疾患の患者に長年寄り添って芽生えた家族同様の気持ちがあった。

教育にも力を入れる。理念は「患者の痛みの分かる医師」。大きな感受性で患者の苦しみを自分のものとして受け止めること、それこそが医師として最も大切な資質だと思っている。

夢はがん撲滅と臓器再生。そして「（患者が）少しでも希望を持って生きるには、未来に希望の持てる助言がいる」。８年前、胃がんで亡くなった妻多佳子さんに思いを重ねながら、患者の苦しみを少しでも軽減できるならと、気功を習ったりもしている。

（中国　06.11.03）

訃　　報

松本　哲哉氏（修道中学校・高等学校教諭：高３７回）

平成18年９月27日　ご逝去　享年40歳

氏は平成３年４月１日に修道学園教諭として就任。

15年間にわたり、数学の教鞭をとられるとともに、弓道班の部長として生徒の指導、育成にご尽力された。

平成17年６月に虫垂がんに冒されていることが判明し、１年余の入院治療、闘病につとめられたが、その甲斐なく若くして不帰の客となられた。

心からご冥福をお祈りいたします。

浅野　長愛氏（浅野家第17代当主）

平成19年１月６日　ご逝去　享年81歳

氏は修道学園の発展、郷土人材の育成に生涯をかけられた浅野長勲公の曾孫にあたられ、学習院中・高等科長、山階鳥類研究所の理事長を歴任された。

同研究所の理事長在任中には修道中学校・高等学校に於いて「鳥島のアホウドリ」と題したご講演をいただいたほか、広島市神田山、新庄山にある浅野家累代の墓所を特別にご案内をいただいた。浅野家からは、修道が財政難であった時期、毎年に亘る多額のご寄付をいただいたほか、現在の千田校地は昭和６年１月に浅野家から無償譲渡されたものである。

心からご冥福をお祈りいたします。

難波　貞治氏

（修道学園同窓会連合会幹事、学校法人修道学園評議員：短３回）

平成19年２月28日　ご逝去　享年76歳

氏は平成８年３月に修道学園同窓会連合会幹事に就任され、11年間にわたり同窓会連合会の発展に寄与され、また同年５月からは卒業生選出学園評議員として永年にわたり学園の発展にご尽力いただいた。

原爆の惨禍や数度の大病を乗り越えてこられたが、昨年来入院治療、闘病の甲斐なく、不帰の客となられた。

心からご冥福をお祈りいたします。